東海大學日本語文學系紀要
多元文化交流 vol.3 2011年6月

＜論文＞

指向性からみる副詞「よく」の意味・用法

――被修飾語の意味要素を手がかりに――

黄淑燕

要旨

「よく」を考える際、多様な要素が複雑に入り込んでおり、単純に割り切れない部分も多々あるが、今回はこれまでとまったく異なった観点から「よく」の分析を試みた。被修飾語の程度性とその被修飾語が「ている」形になったときに読み取られる意味、「よく」が使用されている文の文としての独立性、それから話者の評価を表す文末表現が明示されているか否かなどに焦点を絞って考察を行った結果、次のようなことが見えてきた。

「よく」には行為指向用法と話し手指向用法がある。そのうち、話し手指向用法には話者の評価の気持ちを表すものしかなく、話者の評価を表す文末表現の明示が要求される。話者の評価を表す文末表現の明示がなければ、動詞節のみを修飾する行為指向用法として捉えられる。行為指向用法には「頻度」と「程度」と二つの意味が読み取られる。

被修飾動詞の「ている」形に「繰り返し」の意味が読み取られれば、「頻度」の意味が優先的に読み取られる。ただ、「頻度」と読み取らせるためには、「よく」が使用されている文に、文としての独立性が要求される。文としての独立性がない場合、その被修飾動詞に程度性が見出されれば、まだ「程度」として読み取られる。が、もし、その被修飾動詞に程度性が見出されなければ、「よく」とは共起できなくなるのである。

被修飾動詞の「ている」形に、「繰り返し」の意味が読み取られない場合、「よく」と共起するためには、動詞の程度性が必要となる。被修飾動詞に程度性が見出され、しかも「よく」が使用されている文に文としての独立性があれば、「程度」として読み取られる。また文としての独立性がなければ、「よく」とは共起できなくなる。

キーワード：　話し手指向、行為指向、スコープ、評価、頻度性、程度性

1　はじめに

「よく」は多義性を有する副詞とされている。たとえば、『現代副詞用法辞典』[1]では一、望ましく好ましい様子を表す。

①今度の彼女の小説はなかなかよく書けている。

②「会社の未来は俺の肩にかかっているんだ」「よく言うよ」

二、相手の困難な行為を評価したり賞賛したりする様子を表す。
③「先生逆上がりできた」「よくやった」
三、二の反語の用法で、相手の行為に疑問を持ったり憤慨したりする様子を表す。
④親に向かってよくそんなことが言えるな。
四、行為や状態の程度が十分である様子を表す。行為の場合には満足のいく程度まで十分に行うという意味。状態の場合には好ましい程度がはなはだしいという意味になる。好ましくない行為や状態については普通用いない。
⑤よく調べてからお返事いたします。
⑥「このドレス、どう？」「よく似合うよ」
五、頻度が高い様子を表す。動作にかかる場合には何度も繰り返す様子を表す。状態にかかる場合には一般的な傾向を表す。頻度や傾向が非常に高いためにそれが普通であるよ
うに感じられるというニュアンスがあり、しばしば無価値の暗示を伴う。
⑦お噂は常々よく伺っております。
⑧うちの夫はよく忘れ物をする。
六、完全に達成する様子を表す。かたい文章語で、日常会話には登場しない。〇〇に対して、造詣が深いという意味である。客観的な表現で、特定の感情を暗示しない。
⑨（表彰状）あなたは平成5年7月場所において、よく優勝の栄冠を得られました。
一般に言われている副詞の三分類、様態副詞（例③⑤）、程度副詞（例⑥）、陳述副詞（例②④）にまたがり、多様な用法を呈している。しかし、形態的には「よく」一つだが、なぜ意味
的に、話し手の評価と同時に懐疑や憤慨、望ましく得がたい賞賛と無価値の暗示を共存さ
せることができるのだろうか。
また、様態副詞、程度副詞、陳述副詞、いずれにも分類されうる「よく」の考察を通して、副詞三分類の問題点を具体的に指摘するヒントにもなるのではないかと考えられる。

２　「よく」と各類型の典型的な副詞との相違

山田孝雄が『日本文法学概論』1936で[2]、副詞を「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」と三分類した。それ以来、この分類には多くの問題があると指摘され、状態副詞、頻度副詞、程度量副詞[3]、評価副詞、呼応の副詞、誘導副詞[4]、モダリティ副詞、文副詞などとさまざまに試行錯
誤を重ねてきた。が、少しずつ修正は行われてきてはいるものの、まだ大きく山田説の分類を出ないのが現状である。また日本語教育の現場も依然としてこの分類を利用せざるを得ないでいるのも現状としてある。
「情態副詞」：「のんびり休む」「ゆっくり歩く」「ざあざあ降る」のように、動詞に係ってその動作
の状態を意味的に限定する。
「程度副詞」：「かなり歩く」「少し寒い」「たいそう静かだ」「もっとゆっくり歩け」のように、用
言や副詞に係って、その動作や状態の程度を示す。

「陳述副詞」:「決して忘れません」「たぶん来るだろう」「もし雨が降るなら…」のように、述語
の陳述の仕方を修飾する。
といった解説[5]からも分かるように、陳述副詞は文末形態の面から、程度副詞は副詞の意味的な面から、そして、情態副詞は動作の状態というかなり観念的な面からそれぞれ定義されいる[6]。
「よく」はこの三分類のどれにも所属させられながら、それぞれの典型との違いをも見せている。

11 よく調べてからお返事いたします。

例１は調べ方を丁寧にする、と、「よく」は行為の仕方の側面から修飾をしているように捉えられる。動詞「調べる」に係り、その調べる動作の状態が丁寧であることから、情態副詞と考え
られる。が、典型的な情態副詞の例として挙げられているのはたとえば「ゆっくり歩く」[7]の類であ
る。歩く速度が遅い、というような行為進行中に行為そのものから進行様態から見えてくるもの
である。こういった進行中の行為様態がみえるものと違って、「よく調べる」は事情の深層までじ
っくり深く調査する、しかも調査行為が終了してからでなければ、「よく」であるかどうかは判断で
きないものである。まだ「調べている」最中とは、まだ「よく」には達していない状態で、「よく」に
は修飾されないはずである。
2*まだよく調べている最中です。
　そういう意味で、「よく」は「情態副詞」より、むしろ「程度副詞」に近いものと考えられるが、典
型的な程度副詞は程度性のある動詞のほかに、形容詞、形容動詞さらには副詞を修飾することを主な働きとしている。ところが、「よく」は
　3よく歩く。
　4*よく寒い。
　5*よく静かだ。
　6*よくのんびり休む。
動詞とは共起するが、形容詞、形容動詞、副詞のいずれとも共起しないのである。
　典型的な陳述副詞は動詞、形容詞、副詞など、語レベルの修飾ではなく、「決して忘れません」のように文レベル的に決まった文末表現と共起するのが特徴である[8]。「よく」は「よくそん
なことが言えるなあ」「よく言うよ」のように、文全体に係り、また文全体に係る場合は依頼

（命令）、希望、勧誘のモダリティ[9]「てください／ましょう／たい」などと共起しない点においては陳述副詞的である。だが、ある決まった一つの文末表現のみと共起するものではない点においては、典型的な陳述副詞との差異を見せている。

三分類にまたがってはいるものの、「よく」の意味用法はそのいずれの典型からも外れる様相を呈している[10]。各類型の特性も「よく」の意味・用法には反映されていない。そのため、どの類型に属しているかを考察すること自体は、「よく」の意味・用法の解明には直接つながらないものなのではないかと考えられる。

３　「よく」と共起する動詞の制限

「よく」は意味的に程度を表しながら、形容詞、形容動詞、副詞、名詞を修飾せず、動詞とだけ共起するのであるが、もちろんすべての動詞と共起するわけではない。「よく」と共起しない動詞の種類について、杜2011に詳しい検討が見られる。ここでは、その一部を取り上げ、現在の研究実態の一端を示すにとどまる。

杜2011によると、程度を表す「よく」と共起しない動詞は大きく6種類に分けられる。

一、瞬間動詞：結婚する、卒業する、死ぬ、滅亡する、壊滅する、出発する、到着する、目撃する、一瞥する、持つ、立つ、座る、入る、出る、乗る、会うなど。[11]

二、心理動詞：飽きる、苛立つ、浮かれる、怯える、悔やむ、困る、しょげる、躊躇う、照れる、妬む、腹立つ、迷う、悩む、苦しむ、緊張する、驚く、心配する、愛するなど。

三、生産性の動詞：家を建てる、料理を作る、仏をほる、鶴を折る、洋服を縫う、セーターを編む、穴を開ける、トンネルを掘る、ご飯を炊く。

四、状態性動詞のうち、程度に低から高へといった移行の可能性がなく[12]、高程度のみを表すもの：優れている、限られている、はっきりしているなど。

五、態度の表れに関わる動きを表す動詞のうち、マイナス評価を意味するもの：軽蔑する、甘やかす。

六、第四種動詞：聳えている、ずば抜けている、ありふれている。馬鹿げている。（優れている）[13]

動詞の種類の規定に不明瞭な点が残り、取り上げられている動詞もまだまだ不十分であることがわかる。たとえば、杜2011自身も「よく」と共起しない動詞として挙げられている「違う」「異なる」「効果がある」「権威ある」「疲れる」「要している」などの語だが、いずれも状態性動詞であり、程度移行の可能性があるものである。つまり、上の「四、状態性動詞のうち、程度に低から高へといった移行の可能性がなく、高程度のみを表すもの」ではないにもかかわらず、「よ

く」とは共起しない。
また、たとえば、「よく」は「二、心理動詞」と共起しないとあるが、杉村2007に挙げられてい
る心理動詞のうち「考える」「祈る」は「よく」と共起している。心理動詞の語例として挙げられて
いる「驚く」に関しても
7 友達が台湾に来てよく驚くのはキャッシングマシンが24時間いつでも引き出せることです。
など、「頻度」[14]を表す「よく」になるが、共起が見られる[15]。
　杜2011におけるこの部分の指摘は、二重の問題を抱えているように見受けられる。一つは、どの動詞がどういう種類に属するかの判断であり、もう一つは、ある一つの動詞がどういう意味で「よく」と共起できて、どういう意味で共起できないかの判断である。
詳しい内容は5に譲るが、実際動詞を一つずつ細かく検討していくと分かるように、「よく」と
共起できると思われる動詞でも文脈や文型によって共起できなくなることが多々ある。たとえば、「食べる」だが、「よく食べる」は正文なのに、「*よく食べよう」「*よく食べてください」は非文
となる。「*よく卒業する」は非文だが、「よく卒業したね。」が正文。また、「よく考えてください」が
正文となるが「?よく考えない」で文を切る場合、違和感を持たれる。こういった複雑な事態も
考え合わせると、単純に「よく」はある種類の動詞と共起できる・できないといった判断の姿勢
自体に無理がある、ということがわかる。ある種類の動詞だけではなく、ある一つの動詞と共起
できる・できない判断さえも一口では断言できないはずである。
そういう状況も鑑み、本稿では「よく」との共起が見られる動詞の一部についてのみ検討を行い、それが「よく」と共起する際に、どのような制限がみられるかについて考察を試みる。「よ
く」と共起できない動詞に関しては、まだ検討する余地が多く残っているので、今後の課題とし
たい。

４　話し手指向と行為指向

「よく」はその使用例から、修飾するスコープの範囲が大きく二つに分かれることが観察される。一つは動詞のみをスコープとするもので、動作主がある行為を十分丁寧に行うことを表している。
8 その黒い点々を、よく見てください。
9 彼はよく考えてから決めようと決心した。

もう一つは節か文全体をスコープとし、話し手の評価の気持ちを表現するものである。
10 よくそんな難しいことを知っているね。
11 ありがとう。よく正直に話してくれた。
12 よく平気でいられるな。
13 あんなことをやりだして、よく学校に来られたな。
評価はプラス（例10、11）にもマイナス（例12、13）にもなることができる。
本稿では、前者を「よく」の「行為指向用法」と仮称し、後者を「よく」の「話し手指向用法」と
仮称することにする。
スコープ範囲の相違という一つの観点から「よく」の意味用法を検討し、そこから得られたヒントを副詞全体に押し広げ、副詞全体の分類を考えれば、「情態副詞」「程度副詞」「陳述副
詞」のようにそれぞれ異なった観点から定義されているという整合性に欠ける問題も解消されるのではないかと思われる。
なお、用例からも垣間見られるように、「行為指向副詞」は「よく」が省略されても文は成り立
つ場合が多いが、「話し手指向副詞」は「よく」を省略すると不安定な文になることが多いが、詳
しい検討は今後に譲りたい。

５　「よく」の多様な用法

３で見てきたように、動詞類型で「よく」との共起関係を点検する場合、同じ類型に属するある動詞とは共起するが、別の動詞とは共起しないという現象が多く見出される。それだけではなく、共起できると思われる動詞でも、文型によって共起できなかったりする場合もある。この
現象を突き止めるため、本稿は、「よく」の意味・用法を考える試行段階として、考察の焦点を
被修飾語の意味特性に当てる。
前出を再度掲げることになるが、例えば、「よく調べる」とは「よく」と判断させるために「調べ
る」行為が終了していなければならない。
2*まだよく調べている最中です。
つまり、その行為は実際執行されたか否かに関わらず、「よく」はある行為の結果状態（予想、意志なども含む）について、話し手が評価するという意味を表している。それが、ある動詞
がどのように結果状態性を顕現するかに関わってくるのではないかと予想し、本稿は、動詞の「ている」形[16]が意味するものを手がかりに動詞と「よく」との共起限定について検討する。
被修飾部分のうちの動詞が「ている」を後接した場合どのような意味を見出されるか、その意味の相違はどのように「よく」との共起関係[17]に影響するかについて考察を行う。また、「よ

く」
は文型によって「行為指向用法」になるか、「話し手指向用法」になるかが決まってくるが、その
文型も被修飾動詞の意味特性によって微妙に影響されるときもあるようである。
上、被修飾語の意味特性に関わる部分について述べてきたが、「よく」そのものが表す意味に関しては、「行為指向用法」は動作を仔細に行うまたは頻繁に行うという意味で、「程度」「頻
度＝量的程度」を表すものと看做すことができる。また、「話し手指向用法」も、プラスであれ、
マイナスであれ、話し手が動作主の行ったある行為を普通にできることではないと評価している。普通以上で並外れているという意味で、程度的に「大」だと考えられていることが推察され
る。というわけで、「よく」の二つの用法は、ともに広い意味での「程度」を表すものと見てよいの
ではないかと考える。ただ、「よく」の意味・用法に焦点を当てる場合、「頻度」と「程度」の区分
がどうしても目立ってくるので、本稿では「よく」の分析に限って暫定的に「頻度」を「程度」から
分離して考えることにする。
以下「よく」が①「ている」形が行為結果の持続を表すが、繰り返しを表さない動詞、②「てい
る」形が行為の持続と繰り返しを両方表す動詞、③「ている」形が結果の持続と繰り返しを両方
表す動詞、と共起した場合を取り上げ、さまざまな文型との組み合わせを列挙し、「よく」との共
起条件について検討を試みる。

５．１　「ている」形が行為結果の持続を表すが、繰り返しを表さない動詞

「わかる」を例に、「よく」との共起状況を見てみることにする。

14　よく分かる。　（行為指向）
15　よく分からない。　（行為指向）
16　よく分かる温暖化問題。　（行為指向）
17　よく分かっていらしゃる。　（行為指向）
18　自分でもよく分かっている。　（行為指向）
19　よく分かった。　（行為指向）
20　よく分かったなあ。　（話し手指向）
21　よくここが分かったなあ。　（話し手指向）
22　よくそこまで分かってくれた。　（話し手指向）
23　よく分かるなら…　（行為指向）

24　よく分かったから…　　（行為指向）
25＊よく分かってから…
26＊よくわかると／分かったら／分かれば…
27＊よくここが分かった。
28＊よく分かろうとしている。
29＊よくわかってください。
上の例12〜27からまず、「よく」の係るスコープの範囲が文の形によって異なることが見出される。たとえば、例15「ない」が否定するスコープは「よく分かる」全体なので、「よく」のスコープ
は「分かる」までと理解される。一方、20はスコープが「分かった」のみだと、話し手の「私」が分
かったということになり、20のように話し手が相手のしたことに感心し、評価するものとは違う意
味となるので、文末の「なあ」までと見たほうが適切だろうと思われる。21も同じように理解さ
れ、22も「よくそこまで分かる」が成立しないことから、「よく」は文末まで係るものと思われる。ま
た、スコープが文末までのものは「話し手指向」用法で、話し手の主観的な気持ちを表し[18]、「わ
かる」のみをスコープにするものは動作主がこの行為を十分な程度まで行ったことを表す「行為指向」用法[19]であることも垣間見られる[20]。
　24（正文）と25（非文）は、同じ「から」を後接するが、文節末の性質に違いが見られる。前者
は「よくわかりましたから」と丁寧形に換えても非文にならないことから、文としての独立性が25
より高いことが伺える。
条件を表す接続助詞「と、ば、たら、なら」は、一見「なら」節以外の共起は見られない。が、
30　妻の言い分がよく分かるなら、取るべき行動は決まってくると思います。[21]
のように、「よくわかる」に後接する「なら」は、「と、ば、たら」には見られないいわゆる前提の
用法で、文としての独立性が高く、前件と後件の関係は「条件節」ほど緊密ではないものと考え
られる。
また、「よく」は、修飾される動詞の直前に位置することが要求され、間に他の言葉を挟めないことはすでに指摘されている点である[22]。
すなわち、「分かる」類に関していえば、行為指向用法を示す「よく」は、被修飾動詞の直前に位置し、否定のスコープを超えることができず、文独立性への要求が高い。そして「分かる」「分かった」「分かっている」といった行為結果を表す状態性的な文末表現のみを修飾する、

と
いった様相を呈している。
一方、話し手指向用法を示す「よく」は、文末に「なあ」や「てくれた」といった話し手の感慨や
受益性を表す文末表現が要求される。そういった文末が伴われていない、しかも程度を表す行為指向用法なら要求される被修飾動詞の直前に位置する条件にも満足していないから、27は、非文となる。それに対し、21、22は、それ相応の文末が伴われているので、話し手指向用法と捉え直すことができ、正文となった。
非文となっている28、29に関しては、28は話し手の姿勢、29は相手の動作要求を表している。2文とも「分かる」という行為そのものが行われた結果状態を表すものではないので、行為
指向用法としては捉えられにくい。また話し手の評価を表す文末表現が伴われていないため、話し手指向用法とも捉えられないので、非文である。
なお、非文となっている[23]例25～29いずれも「よく」がなければそれだけで成り立つ文だった。そのため、非文となった理由は、「よく」にあると判断される。
まだ細かい検討が必要だが、この類に入る動詞は基本的に「よく」と共起するもので、「ている」が行為結果の持続を表すものと思われる。

５．２　「ている」形が行為の持続と繰り返しを両方表す動詞

ところが、次の「見る」に係る行為指向の「よく」は、相変わらず否定との共起ができないこと
以外、文としての独立性や評価のあるなしに関わらず、すべてと共起する。終助詞「ね」「なあ」
（例33、37）が存在しても、「よく」が行為指向用法としての理解が優先されている。
31＊よく見ない。
32　よく見る。　（行為指向）（頻度）
33　よく見る子だ。　（行為指向）（頻度）
34　よくあの子を見る。　（行為指向）（頻度）
35　よくあの子を見るね。　（行為指向）（頻度）
36　よく見ている。　（行為指向）（頻度、程度）
37　よく見るから間違うはずがない。　（行為指向）（頻度[24]）
38　よく見るなら、もう少し覚えているだろう。　（行為指向）（頻度）
39　よく見るからつい買ってしまった。　（行為指向）（頻度）
40　よく見たなあ。　（行為指向）（頻度[25]、程度）
41　よく見たからもういいでしょう。　（行為指向）（程度）
42　よく見てから…　（行為指向）（程度）
43　よく見ると／見れば／見たら、　（行為指向）（程度）
44　よく見ようとしている。　（行為指向）（程度）
45　よく見てください。　（行為指向）（程度）

46＊小さいのによく細かいところまで見た。
47＊長いのによく飽きずに見た。
48　小さいのによく細かいところまで見たね。　　（話し手指向）
49　長いのによく飽きずに見てくれた。　　（話し手指向）
話者の評価を表す文末「なあ」「てくれる」が明示され、しかも「よく」が被修飾語の直前に位
置しない例48、49の場合だけ、話し手指向用法として捉えられる。
この中で「分かる」類と大きく違いを見せているのは、この類の動詞に前接する「よく」は「程度」だけではなく、「頻度」をも意味することである。文独立性の高い32〜39の「よく」は意味的
に「頻度」を表し、「分かる」類では非文となる42〜45の文型は「程度」を表している。例37と41
は文型的には同じだが、「から」が前接する「見る」の形は37が「る」形で41が「た」形という点
で違いがある。結果的に「る」形を取る例37はやはり優先的に「頻度」と読み取られ、「た」形は
形式から「頻度」の意味を排除してしまうから、「程度」と読み取られるのである。例40の文型は
「分かる」類でも正文になるもので、頻度として捉えることも可能だが、普通は程度を優先的に
捉えられるようである。
ここから、動詞に頻度性が読み込まれるものに関しては、「よく」に修飾される場合、優先的に頻度が読み取られることがわかる。なお、前述したように頻度を表す「よく」は動詞の直前に
位置しなくてもよいとの指摘があった[26]が、「よく」と被修飾動詞の間に挟めるのは被修飾動詞
にとっての必須成分に限るようである（例34、35）。挟まれるのは「細かいところまで」「飽きず
に」のような非必須成分となると話者の評価を表す文末表現と共起し、話し手指向用法にしないと非文となる。
ただ、なぜ「分かる」類では非文となる42〜45の文型がここでは程度を表すものとなりうるのだろうか。この点については次のように理解される。
まずは、「と、ば、たら」や「てから」など、一旦行為の完成を要求し、延々と行為の繰り返しの
可能性を排除してしまう文型の場合、動詞自体に「程度」性が存在すれば、スキーマ的に非文とせず、一回で完結する程度性を読み込むのである。
そしてなぜ「分かる」類の場合、その程度性が読み込まれなかったかというと、「分かる」類は「わかっている」が「頻度」と解釈されないことからもわかるように、行為の一回ずつの完

了性
がはっきりしていない。この点が、行為の一旦完了を求める「と、ば、たら」や「てから」と撞着を
起こし、排除され、非文となったのだ、と考えられる。
また、適切な時間詞が備えられる場合もそうだが、名詞修飾文の場合も「た」と「る」の対立が薄められ[27]、「頻度」と読み取られることもある。
なお、「ている」が行為の持続を表すが繰り返しを表さない動詞は現段階ではまだ見当たっていない。

５．３　「ている」形が結果の持続と繰り返しを両方表す動詞

それでは、程度性が読み込まれない動詞についてはどういった様相を呈しているのだろうか。「もらう」を例に取り上げてみると、次のようになる。

50＊よくもらわない
51　よくもらう。　（行為指向）（頻度）
52　よくお土産をもらう。　（行為指向）（頻度）
53　よくもらうお土産。　（行為指向）（頻度）
54　彼からよく誕生日プレゼントをもらっている。　（行為指向）（頻度）
55　昔お歳暮でよくもらった／ていた缶詰のプリン。　（行為指向）（頻度）
56？よくもらった。
57　昔よくもらったなあ。　（行為指向）（頻度）
58　よくもらうなら…　（行為指向）（頻度）
59　よくお土産をもらうから少しお返しもしなくては…（行為指向）（頻度）
60？よくもらったから…
61＊よくもらってから…
62＊よくわかると／分かったら／分かれば…
63　よくこんなものもらってきたなあ。　（話し手指向）
64　よくもらってくれた。　（話し手指向）
65＊よくもらってください。

頻度の面に関しては５．２と同様だが、動詞の性質から程度が読み込めないので、５．２で「程度」と理解されるものは全部非文となっている。

６　まとめ

以上、これまでとまったく異なった観点から「よく」の分析を試みた。
この過程から見えてきたのは、「よく」には行為指向用法と話し手指向用法がある。そのうち、話し手指向用法には話者の評価の気持ちを表すものしかなく、話者の評価を表す文末表現の明示が要求される。話者の評価を表す文末表現の明示がなければ、動詞節のみを修飾する行為指向用法として捉えられる。
行為指向用法には「頻度」と「程度」と二つの意味が読み取られる。
被修飾動詞の「ている」形に「繰り返し」の意味が読み取られれば、「頻度」の意味が優先的に読み取られる。ただ、「頻度」と読み取らせるためには、「よく」が使用されている文に、

文とし
ての独立性が要求される。文としての独立性がない場合、その被修飾動詞に程度性が見出されれば、まだ「程度」として読み取られる。が、もし、その被修飾動詞に程度性が見出されなけ
れば、「よく」とは共起できなくなるのである。
被修飾動詞の「ている」形に、「繰り返し」の意味が読み取られない場合、「よく」と共起するた
めには、動詞の程度性が要求される。被修飾動詞に程度性が見出され、しかも「よく」が使用されている文
に文としての独立性があれば、「程度」として読み取られる。文としての独立性がなければ、「よく」とは共
起できなくなる。
「頻度」の意味を表す「よく」はあまり単純「た」形[28]の被修飾動詞と共起しないが、適切な時間詞が添えられれば、単純「た」形と共起することもある[29]。
「よく」が使用できる文型のうち、「てください」がもっとも規範を厳しくしている。他人に対する要求なの
で、まずは被修飾動詞は意志的な動詞でなければならないし、その行為の実現に対して、話者はプラスに評価していなければならない。しかも文型的に独立性が低いので、「程度」の意味しか読み取られない。
なお、「ある」「いる」など、「ている」を伴わない、「よく」と共起する状態動詞の場合は、「頻度」と理解
されるのが普通である。また、頻度性も程度性もない語とはそもそも共起しないと思われる。
以上のように、「よく」を考える際、被修飾語の程度性とその被修飾語が「ている」形になったときに読み取られる意味、「よく」が使用されている文の文としての独立性、それから話者の評価を表す文末表
現が明示されているか否かなど、さまざまな要素が複雑に入り込んでいる。単純に割り切れない部分も多々あるが、今回は被修飾語の「頻度性」「程度性」といった意味的要素、および文型からくる語彙への意
味的要素への制限に焦点を絞って考えてみた。
ただ、何を持って被修飾語に程度性があると判断できるのか、「よく」と共起できない動詞にはそのような特性が見られるのかなど、課題は依然として多く残されている。

（こうしゅくえん　東海大学日本語文学系）

注

1　『現代副詞用法辞典』1994より抜粋。

2　畠郁1991「副詞論の系譜」。

3　仁田義雄2002『副詞的表現の諸相』

4　渡辺実1971『国語構文論』

5　『日本語教育辞典』「副詞」項、1982年、森田良行担当

6　この視点の相違が各語の類別所属を曖昧にさせているものと思われる。

7　「よく歩く」は「歩く量が多い」か「いつも歩いている」かといった量や頻度を表す意味となる。

8　森本1994では山田説、時枝説、橋本説、渡辺実説、工藤浩説を整理し、「陳述副詞」の特徴を次のようにまとめた。①.いわゆる陳述表現と一定の共起制限を持つ。②話し手の主観性の表現である。③文の客観的内容とは結びつかない。P10

9　例えば「よく調べてください」の「よく」は動詞「調べる」に係るもので、文全体を修飾するものとは捉えられない。

10　杜2011では、情態副詞「しっかり」程度副詞「とても」量副詞「たくさん」頻度副詞「ちょくしょく」を「よく」の類義副詞とし、その違いを示すことによって、「よく」は三類型の中間に位置するものと指摘している。

11　ものによっては「頻度」の意味で共起することもあることも言及している。また、「持つ」以下はなぜ瞬間動詞になっているのかは不明である。

12　たとえば、可能動詞、「似合う」「晴れる」などは程度に移行の可能性があるものとされている。なお、状態動詞は普通「ている」を伴わない「ある」「いる」、可能動詞などを指すのだが、ここで言っている「状態性動詞」の内実は不明である。

13　第四種動詞のうち、なぜか「似ている」のみがいつも「よく」と共起する。

14　杜2011では「程度」と「頻度」がどのように「よく」との共起関係に影響するかについては、あまり説明されていないが、本稿では「頻度」も一種の数えられる「程度」と解するという立場を取りたい。

15　そういう意味では、むしろ工藤1995に挙げられる思考動詞（思う、考える、疑う、信じる、祈る）感情動詞（諦める、悩む、迷う、喜ぶ、呆れる、驚く、困る）知覚動詞（感じる、聞こえる、におう、見える）感覚動詞（痛む、感じる、痺れる、疲れる）のうちの感情感覚動詞との共起が見られないとしたほう

が事実に近いのではないかと思われるが、再考が必要である。

16　「ている」を使用した動詞分類は金田一春彦1950「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63による状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞が定番だが、今回は「ている」が表す意味に焦点を当てる。

17　ここで言う「共起関係」は単に「よく」はある動詞と共起できる・できないということではなく、同じ動詞で、どのような文型なら共起できる、どのような文型の場合は共起できないかについて考えることである。

18　例20.21.22がこれに属する。

19　例14.15.16.17.18.19.23.24がこれに属する。

20　中国語で考える場合、行為指向の「よく」は〈很〉〈非常〉〈仔細〉などと程度性の副詞に訳されるのに対し、話し手指向の「よく」は副詞にはあまり訳されないようである。

21　hppt://098u.com/wp/2010/01/19108より。

22　杜2011　P65では、森本1992の「頻度副詞は動詞句をスコープとするもの」という指摘を受け、「よく熱を出す」などを例に、頻度の「よく」は必ずしも動詞の前につくと言うわけではないが、その他の「よく」は、動詞の前につかなければならない、と指摘している。ところが程度を表すものとして「よく気がつく」「よく気がきく」なども見出されているので、結合性の高いものに関しては再考が必要のようである。

23　ものによっては「が格」や会話の文脈を付け加えた方が落ち着くのもある。たとえば、 例25に関しては、「分かってからじゃ遅い」「妊娠がわかってから、どのぐらい経ちましたか」など。

24　例36、37、40、いくつか、文脈によって「頻度」「程度」両方解釈可能のものがある。たとえば、例37が既実現行為として理解される場合だが、同じ文型で未実現行為を表す場合、「後でよく見るから…」のように、程度と解釈されることもある。

25　「昔よく見たなあ。」にすると頻度を表す「昔よく見ていたな」の縮形とみることもある。「後でよく見るから」もそうだが、文末の「る／た」によって頻度／程度と、理解される傾向が見出されても、前接する時間詞の性質によって、読みが転換することがある。

26　杜2011。

27　下の例55がその一例である。

28　「ていた」は排除される。

29　たとえば、「昔よく見たね。」

参考文献

杜宜衿（2011）政治大学日本語文学系修士論文「副詞「よく」の意味用法
――類義の副詞との比較を中心に――」

杉村泰（2007）「複合動詞との共起から見た日本語の心理動詞の再分類」　『2007日語教学国際会議論文集』台湾東呉大学

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版

森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

飛田良文、浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

国立国語研究所（1991）『日本語教育指導参考書19副詞の意味と用法』
　大蔵省印刷局

日本語教育学会（1982）『日本語教育事典』大修館書店

渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房